

こども委員会のよりみちコラム

今回の担当：五十嵐 修太

書いた日：2023年6月6日

こんにちは、五十嵐です。新年度からすでに2ヶ月が経ち、早いもので今年も残り半年となりました。年々、月日が経つのが早く感じるようになってきている気がします。私の職場にも新しく職員が増え、色々助けてもらいながら働いております。

自分よりも年下の方と話をしたり、自分の子供と触れ合っているときに、社会人1年目の頃をよく思い出します。その中に思い出したくないような恥ずかしいエピソードや、楽しかった思い出がたくさんよみがえってきます。

そこで今回のコラムですが、自身の入社したての頃の印象に残っている、あるエピソードと最近自身の生活で感じたエピソードの2つから改めて感じたことをここに書かせていただきます。

それは利用者様のリハビリを終え、リハビリベッドから利用者様を起こして靴を履かせているときに、傍にいた先輩のリハビリスタッフから「その人は自分で靴が履ける人だよ。」と言われました。その時は、何とも気にせず、「あ、そうなんだ。」としか考えていませんでした。

私の息子のエピソードでも同様の事がありました。少し前までは、息子がロボットの玩具で遊んでいるとパーツが外れてしまい、細かいパーツは自分では付け直すことが出来ないため、「直して！」とバラバラになった玩具を私に手渡ししてきました。ですがつい先日、同じく玩具遊びをしていてパーツが外れてしまったとき、私が「直してあげるよ。」と玩具を取り上げようとすると、息子が真剣な顔で「だめだよ！」と言って玩具を渡しませんでした。結局、玩具は息子の手で元通りになりました。

今になって考えると、入社当時の私は仕事を覚えることに必死で、その利用者様のことを「見る」ことは出来ていなかったんだと思います。そもそもその利用者様は、靴を履かせてほしいとは一言も言っておりませんでした。その方がどうしたいか、どのくらいの能力があって、どのくらいの活動や参加が行えるかという分析が足りておらず、考え無しに行動しておりました。子供も同じく、子供が日々変化していると分かっているつもりで、どのように変わっているのかまでは考えておりませんでした。

「靴を履く」「玩具をくっつける」という日常にあふれている行為が、その人にとってどのような意味を持つか、考え分析することが作業療法士の専門性のひとつだと、今なら少しだけ分かるような気がします。

今月は私の振り返り、再学習が中心となってしまいました。来月もどうぞよろしくお願いいたします。

